

真のサステイナブルをつくる!

主体的な学びで実を結んだ新ビジネス

●法学部 3年次生
鳥井田 稔仁 さん



鳥井田稔仁さんが、自身のビジネスを始動させたのは2024年3月15日のこと。仲間2人との船出は、中学生の頃から磨き上げてきた初志が形になった瞬間だった。志の背景にあったのは、環境に対する危機感だ。世界中で大量に廃棄される衣服、変わりゆく地球環境。「なんとかしたい」、「自分ができることは何か」、そんな自問の答えに迫る。

LEADERS NOW!



▲衣服からアップサイクルされたバッグ

●マスメディアも注目した新事業

本誌の取材冒頭に手渡された資料は極めて明瞭だった。「2024年6月に行われた大学主催のメディア懇談会で私たちの事業についてお話しした時の資料です」。鳥井田さんは、メディアの前で堂々と自分たちの考えと実績を語り、新聞記者はその活動を紙面で取り上げた。鳥井田さんが立ち上げた事業「ETHOS」は、古くなった衣服を縫製して、バッグなどに再生するというもの。「ブランド名は『3150築(さいこうちく)』。廃棄されるものに、デザイン性や機能性を加えることで、商品価値を高めて再利用するアップサイクル事業です」。顧客は自身の古着を3150築に送り、ECサイト上で選んだトートバッグやサコッシュに縫製してもらい対価を支払うという、受注生産販売の形態を取っている。



●「もったいない」と環境への危機感

事業の原点は「お気に入りのジーンズが小さくなって履けなくなった」中学生時代にある。「思い出が詰まっていて、捨てるのはなかった。そこで思いついたのが、トートバッグへの再構築でした」。ミシンで縫って作り上げた元ジーンズのバッグは、今も愛用している。(◀写真) また、大学生になって感じた変化も後押しした。「幼い頃からアウトドアスポーツを楽しんできたのですが、最近の海はサンゴ礁が減り、ゴミが増えている。スキー場には雪が降らないし、雪質も落ちている」。鳥井田さんを突き動かしたのは、「もったいない」という意識と悪化する地球環境への危機感だった。



幼少期からアウトドアスポーツに親しんできた鳥井田さん (写真上: スキー場にて / 写真下: ダイビング) ▶

●構想をバックアップしてくれた「関西大学山岡塾」

危機感を感じながらも、自分に何ができるのかは分からなかった。転機は大学2年次生の時に、関西大学の「山岡塾」という正課外プログラムに出合ったことだ。山岡塾は、2022年に大学昇格100周年を記念して創設された。選抜された学生が、専門家・経営者からの助言や資金援助を受けながら、社会的課題の解決を図ることを目的としている。鳥井田さんは「主体的な学び」を重視していたため、迷わず応募して、入塾を果たした。

塾生は、「教育」「健康」「環境」の3つのテーマから一つを選び、チームで具体的な課題を設定した上で、仮説設定と検証を繰り返して解決策の提示を目指す。鳥井田さんは「環境」を選択し、心の中で温めてきた古着の再構築をテーマに掲げると、2人の塾生が賛同し、チャレンジが始まった。



▲関西大学経済人クラブ主催「山岡塾 太郎を訪ねて視察・講演ツアー」に参加

山岡塾・報告会の様子

▲(写真左から)「ETHOS」メンバーの今井洸太さん、鳥井田さん、中島里佳子さん

■関西大学山岡塾とは

関西大学は2022年に大学昇格100周年を迎えたことを契機に、学園の理念(学是)である「学の実化」^(※1)を具現化する新たな試みとして、関西大学山岡塾を創設。「今日より良い明日を創ろう」のビジョンのもと、「学の実化を体現するフロントランナー」^(※2)の育成を目指し、社会的課題の解決に向けてチームで協働して取り組む正課外プログラムとなっている。

塾の活動は、個人ではなく「チーム」で協働しながら取り組むため、学部、研究科、学年の垣根を超え、互いに刺激し合いながら活動することができる。また、校友(経営者や起業家、専門家等)による専門的な助言や活動資金の支援を得ながら実践形式で取り組むことができる。

2024年度で3期目を迎えた塾では、本学の学部生・大学院生や本学併設校の高校生(原則2年生)等を対象に、吹田みらいキャンパス周辺の地域課題を解決する持続可能な仕組みの提案に向け、4チームに分かれて活動を進めている。

●関西大学山岡塾 <https://www.kansai-u.ac.jp/yamaoka/>



※1「学の実化」……大学は教育研究に実社会の知識や経験を取り入れ、社会は大学の学術研究の成果を取り入れることによって「学理と実態との調和」を求める考え方のこと。
※2「フロントランナー」……課題を自ら設定し、解決に向けて、自己の役割を正しく認識しながら「主体的」に考案できる人材を指す。

●調査から見えた問題点と絶妙な転換

進めたのは自身の構想の是非・正否を問うアンケート・インタビュー調査だ。すると、次々と想定外と新発見に出会う。最初にぶち当たった壁は商標権だった。「当初は回収ボックスで集めた古着をバッグにして、不特定多数に売るというスキームを考えていました」。しかし、衣服の多くはブランドやメーカーロゴが付いているため、誰かれ構わず販売すれば、消費者はそのブランドの商品だと勘違いする恐れがあり、法にも触れる。「とはいえ、ロゴを外す作業は大変ですし、外せば価値も下がる」。再考し、たどり着いたのが前述の受注生産販売だった。「お客様の古着をそのままバッグにして返すので、たとえロゴが付いていても誤認はない。同時に在庫を抱える心配もなくなりました」。在庫が多くなれば、廃棄という本末転倒の可能性もあった中で、絶妙な転換といえた。

●やって良かったと感じた一通のメール

その他、服飾の専門学校に取材をしたり、山岡塾の講師主催のブランディング勉強会に参加したり、運営委員を務めた文化祭でアンケートを実施したりと、できる限りの調査と検証を行い、ビジネスモデルを固めていった。「ファッション好きの私は、個人的でオンリーワンのバッグの販売を考えていたのですが、取材やアンケートをする過程で、『デザインはシンプルな方がいるんなら服に合わせやすい』『一点物へのカスタマイズはコストが掛かり過ぎる』といった意見も参考にしました」。ECサイトや事業ロゴの作成依頼、縫製業者探しなどにも奔走。学業との両立で多忙を極めながらも、メンバーと協力して事業化にこぎつけた。心から良かったと感じられたのは、一通のメールが届いた時だ。「私たちを紹介する新聞記事を読んだ方からのメッセージで、理念を理解してくださって、注文と共に『応援しています』と添えてあった。うれしくてスクショを残しています(笑)」。



ロゴ作成の打ち合わせ

大阪文化服装学院へ訪問取材

●理想は「たまたま環境に良い商品」

「注文数を増やし、事業を拡大していく」。今の目標をそう語る鳥井田さんには、信念がある。一つは「『アパレル産業の未来を照らす、始まりの灯になること』。衣服は人間にとって不可欠なもの。だからこそ環境に負荷を掛けずに楽しめるものを提供したい」。そして、最終的には「環境に良い」という看板を外したいという。「サステイナブルファッションやエシカルファッションというのは、一過性のトレンドだと感じており、流行が去っても、求められ続けるものにしていきたい」。商品のデザイン性を高めるのに余念がないのは、そこに理由がある。「『良いなと思った服やバッグが、たまたま環境に良いものだった』が理想です」。真に持続可能な事業とブランド、そして社会をつくるべく、鳥井田さんの挑戦は続く。